

四回目のプラスα集会のテーマは

ヨーロッパ型資本主義

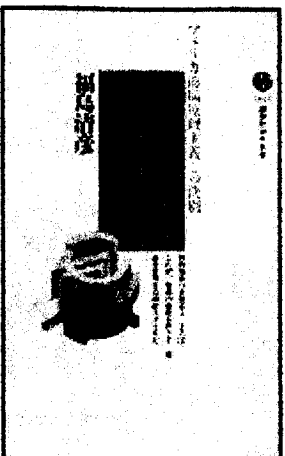
東大阪支部は今年度第四回目のプラスα集会を十六名の参加で二十日に開催しました。

今回のテーマはヨーロッパ型資本主義です。

このテーマは小泉改革とも関連して、アメリカ型の資本主義がグローバルスタンダードとして紹介されるなかで、果たしてそうだろうか？という問題意識のもとで選ばれました。

報告の元になったのは左のテーマと同名の講談社・現代新書の一冊でした。

この本はインターネット上で検索すると「紹介記事」がかなりの数になります。あるところでは……



日本の政府や学者の殆どは日本の経済のあり方はアメリカ型以外には無いとして議論しているように見えます。北欧が独特の型の資本主義国家として成り立っていることは周知のことですが、なぜか日本のモデルとして挙げる人は少数です。

この本は、北欧に限らずにヨーロッパ全体を觀察して、ここにも日本のあり方を考えるときのモデルがあるではないですか！と主張しています。ヨーロッパに關することは情報としても、少ないので貴重な文献だと思えます。新書ですから、構成や章立ても工夫がされていて読みやすく、文章もわかりやすいのでお勧めです。

と紹介されています。
別のところでは……

多くの人に読んでもらいたい良書である。著者は一橋大学の大学院に学び、野村総研に入り、アメリカに九年、その後イギリスで三年をすごし、その間ヨーロッパの国々を広くまわり、得た結論は

「ヨーロッパとアメリカとは天と地ほど違う」というものである。

もちろんヨーロッパとてひとつではない。高福祉・高負担で社会民主主義によって主導されている北欧と、中福祉・中負担で企業と教会が社会のパートナーになっているドイツ、フランス、イタリーなどはちがう。しかし、市場競争による規制を重視し、株式価値で動き、不平等を経済効率の前に従わせるアメリカ型に対して、市場は利用するものであり、その暴走は規制し、企業も社会のためにあると考え、人々の福祉を志向するのがE.U.型である（毎日新聞のサイトより）

参加者の意見は……

● 北欧の旅行で老人ホームを観る機会があつたが、一人一人が大事にされているのを実感したことがある。

● 小泉改革への対抗軸を革新陣営が示すことが必要であるが、現状においてはそれが欠けている。ヨーロッパ型を勉強することは資本主義の多様性を知ることになるので興味がある。

などでした。